園長先生の子育てひろば

令和４年１月

新年あけましておめでとうございます

園長　山中　文

このところ、年明けには、干支にちなんだ動物の絵本や歌などについて書いてきました。干支にもともと動物の意味は関係ないようですが、それはそれとして、今年は寅ですね。動物の「虎」が主人公になった絵本ってあったかなあと思い浮かべました。

有名なのがありました。『ちびくろサンボ』（ヘレン・バンアーマン著、フランク・ドビアスイラスト、光吉夏弥翻訳、瑞雲舎など）です。世界的に広まった本ですね。おとうさん、おかあさんから新しい傘、上着、ズボン、靴をもらった子どもが散歩に出かけると、虎に何度か会います。そして、それぞれの虎に、食べられないように大切な新しい服などを一つひとつ差し出していくうちに裸ん坊になってしまいます。さあどうなるか、というお話です。

子ども心にカラフルな絵柄に惹かれ、虎たちがぐるぐると回ってバターになるというのが不思議で愉快でした。

でも、実は、この絵本は、黒人差別問題や著作権問題で絶版したり復刊したりということでも話題となったものでした。差別問題から絶版を主張する人々と良書であるとする人々との議論がありました。それでも読み継がれているということは、この絵本にはそれらの議論を超える大きな魅力があるということなのでしょう。

実は、このように本や歌などには、私たちの目に触れる前に、出版・放映されなくなるものがあります。歌も、卑猥なことばや揶揄するような内容など、公序良俗に反すると思われるものを放映前に自主規制するということで、要注意歌謡曲指定制度というものがあった時代があります。「公序良俗に反する」というのをどこまでどのように捉えるか難しいものです。反戦歌の内容になっているものなど、一部にはなぜこの歌が規制されるのかと疑問視された歌も入っていました。そんな歌は、それを乗り越えて歌い継がれているようです。

好ましくないものに触れさせないというのは一理ある判断だと思いますが、問題になったからとか規制されたからという結果だけで遠ざけるのではなく、一度手にとって、それを自分だったらどのように考えるか、と見直してみるのもいいのではないでしょうか。お子さまが大きくなった時、そのような絵本や歌について親子で話しあってみるというのも、面白いことだと思います。